

2021年8月8日

大井バプテスト教会

説教題「賛美あるところに平和あり」ヨハネ福音書1章1～5、14～18節

主任牧師 加藤 誠

**「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。」**「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」(ヨハネ福音書1章5節、14節)。

渡邊さゆり牧師(日本バプテスト同盟)が聖書を教えている保育専門学校で礼拝に出席していた学生から「賛美歌を歌っていると平和な気持ちになりますね」という応答をもらったそうです。「どういうことですか?」と渡邊先生が尋ねると学生は「賛美歌を歌っていると誰かに対する憤りが静められ、誰かから受けた痛みがやわらげられる気がします。そして賛美歌を歌っていたら相手をやっつけたいとか、戦争したいという思いにならないですよ?」という答えが返ってきたとか。確かにそうですね。賛美歌を歌うと憤りや痛みで満ちていた心が和らげられ、癒され、平安な思いにされるという経験を、誰もがしたことがあるのではないのでしょうか。

その学校の礼拝でいつも賛美するのは校歌の『正しく清くあらまし』(教団讃美歌452番)だそうです。この歌詞は若くしてインド伝道に献身し35歳で劇症インフルエンザのため亡くなったH・A・ウォルター牧師が大学を卒業したばかりの頃、これからどう生きていくのか思い巡らしていた時に作詞したものだそうです。英語の歌詞をそのまま訳すと一番は次のようになります。「わたしは正しくありたい／わたしを信頼してくれている人たちがいるから。わたしは清くありたい／わたしを心にかけてくれている人たちがいるから。わたしは強く、勇敢でありたい／この世界には苦難と試練があふれているから」。そして四番以下ではイエス・キリストが賛美されていきます。「いったいだれがこんなにも低く、貧しく、痛みの中に生きられたらどうか。いったいだれがわたしの心に思い浮かびもしなかつた喜びを与えてくれたらどうか…」と(※原作は六番まであります)。

賛美歌は私たちの心にイエス・キリストを映し出し、神の国の愛と正しさに向けて私たちの心を高く引き上げてくれます。賛美歌が歌われるところでは誰一人として他者を傷つけ、悲しませる戦争を肯定することはできないのではないのでしょうか。

ヨハネ福音書1章の書き出しは、ヨハネの教会による「キリスト賛歌」と言われています。4節、5節**「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」**。「言」であり「命」であり、私たち人間を照らす「光」。その方はイエス・キリスト。それに対し「暗闇」は「私たち」のこと。私たちを照らす光として来られたキリストを、私たちは理解しようせず、背を向けて拒否したのでした。ほんとうは光に照らされることを求めながら、でも自分の思うとおりに生きたいと光に背を向ける。愛を必要としているのに頑なになり、正しさを求めているのに悪に心惹かれ、平和を願いながら暴力的な言葉と態度が出

てきてしまう。「光」を素直に受け入れられないわたしの抱えている「闇」、わたしの中の弱さと矛盾と屈折をヨハネ1章は浮き彫りにします。

新共同訳で「暗闇は光を理解しなかった」と訳されている5節は、新しい翻訳の聖書協会共同訳では「闇は光に勝たなかった」と訳されています（口語訳も同じ）。「理解しなかった」と「勝たなかった」ではずいぶんと意味が違うように思いますが、原文のギリシャ語の言葉には「つかむ、とらえる」という原意があり、そこから「理解する」という意味と「屈服させる」という二つの意味が派生しているようです。英語の聖書にも両方の翻訳がありました。「闇は光を理解できなかったし、光に勝つこともできなかった」のです。

私たちはキリストを理解できずに、十字架に追いやり、その命を奪ってしまいました。にもかかわらず、私たちは十字架の暗闇のただ中で輝き続けるキリストの光に勝つことができなかった。闇の頑強な抵抗と拒絶にあいながらも、光は闇の中にとどまり、恵みと真理をもって私たちを照らし続けるからです。そのようにキリストの命の光が今日も明日も輝き続けるゆえに、私たちは今日、暗闇の中にあっても神さまの恵みと真理に向かって生きる力と希望を与えられる。そのあふれる恵みを賛美しているのが、ヨハネ福音書1章の「キリスト賛歌」なのです。

沖縄の普天間基地ゲート前で毎週月曜日の夕方6時から一時間、続いている「ゴスペルを歌う会」の働きがあります。その「ゴスペルを歌う会」に2年前の11月に参加させてもらったときの光景が今も心に深く刻まれています。6時に始まった時には夕暮れの光に浮かび上がっていた普天間基地がだんだん夜の闇の中に沈んでいくのを見ながら、賛美歌を歌うのです。20名ほどで歌う賛美の声は、目の前の道路を行き交う車の騒音でかき消され、どんなに大きな声で歌っても誰かが振り向いてくれるわけでもなく、基地の中から何か反応があるわけではありません。「この暗闇と車の騒音の中で賛美を歌っていったい誰が聴いているんだろう?」。心の中がなんとなく空しい思いで覆われていきます。けれども『荒れ野の果てに』などクリスマスの賛美歌を歌っていると、「ああ、でもこの暗闇の中にこそイエス・キリストは生まれてくださったのだ」、「羊飼いたちは飼葉桶に生まれた赤ん坊を見つけて喜び、賛美を歌いながら野原に帰って行ったのだなあ」、「この暗闇の中でイエスさまは『神の国は近づいた!』と弟子たちを励まし、黙って十字架を背負い、ゴルゴタの丘を上っていかれたのだなあ」と、賛美の中で主イエスを想う思いが広がっていった時に、心の中に灯された光が少しずつ大きくなるのを感じました。「光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった」。ヨハネ1章の「キリスト賛歌」がわたしの中にも生まれたのでした。

日本の私たちがいつも以上に平和を祈るように導かれている八月。「平和をつくりだす者はさいわいである」との主イエスの励ましを聞きながら、主イエスが私たちに与えてくださった神に向かう賛美を心に刻みたいのです。そして新しい礼拝堂で、その賛美を共に主の前にささげる日が早く来ますようにと祈ります。